

2011.11

15

# 水の源

M I Z U N O M I N A M O T O

フォトストーリー

牛主 城口治享さんに聞く  
がちんこ勝負「闘牛」は熱い  
(愛媛県宇和島市)

特集

全国水源の里  
フォトコンテスト

水源の里発 おすすめご当地グルメ  
島根県 出雲市「ZENZAIロール」  
徳島県 那賀町「かきませ」

全国水源の里シンポジウムを開催  
(大分県佐伯市)

巻頭インタビュー

水源の里へ思いを馳せる

「誰かがやってくれるだろう」。  
そんな甘えの発想は変えるべきです。

高木 美保さん



六十尋滝 (三重県大台町)

# 水源の里へ思いを馳せる

「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」。  
 「水源の里」の理念は、双方の地域に住む人たちが  
 お互いの暮らしや環境を理解し、感謝し合ってこそ実現します。  
 このコーナーでは、文化人・著名人に、  
 そうした「水源の里」にまつわるお話をうかがいます。  
 [聞き手] 『水の源』編集長 町井 且昌 [撮影] 坂井 保夫



高木 美保 さん

「誰かがやってってくれるだろう」。  
 そんな甘えの発想は変えるべきです。

都会と田舎、  
 それぞれに魅力もあれば  
 課題もある

—— 東京から那須に転居されて、14年目。よくご決心されたなあというのが率直な感想です。同時に、何か時代の潮流というか先鞭というか、そんな気がします。

そういうことを考えさせられる時代になっているんでしょうね。豊かさ、豊かさというなかで、お金を稼ぐためにいっしょうけんめい働いて、ストレスを毎日毎日ためて、眉間に皺をよせて。それでいいのかなって、ちょっと立ち止まって考えるような。

例えば、都会のスーツ、ネクタイ族が幸せに暮らしているかという点決してそうではなくて、ウツになってもおかしくないほどストレスにさらされて生きている人も多い。それでも経済第一というもひとつの価値感でしょうけど。

「お金はないけれど、ときどき生活の不安を感じることもあるけれど、四季の移ろいを感じさせてくれる自然の中に生きる」というのも一つの価値観ですよね。「どっちが自分に必要なのか」と日々の暮らしの中で問われているんだと思います。

—— 価値観が揺らぐなかで自信を持って行動するのも難しいですね。

都会に行けば誰もが就職できて、お金持ちになって、高級マンションに住めるかという、とんでもない。生活格差は広がっているし、将来を不安に思う人は増えている気がします。



昭和37年7月29日生まれ。  
 (出身地東京都葛飾区)  
 昭和59年、映画「Wの悲劇」でデビュー後、ドラマ「華の嵐」の主演をはじめ、NHK大河ドラマ等に出演。またバラエティ番組にも挑戦し、お茶の間の人気者となる。平成10年11月、自然と共にある生活を求めて、栃木県那須高原に住まいを移し、農業にも取り組む。現在は芸能活動のみならず、講演や執筆業など幅広い活動を展開。著書多数あり。フジテレビ「とくダネ!」レギュラー(水曜日)のコメンテーターとして出演中。

—— 田舎に住んでいると、なかなか、それに気がつかない。

田舎に移り住んで、都会より田舎のほうがいいとアピールする方がいるけれど、ちょっと違うと思うのね。都会にも良い部分はありますから。競争にさらされて、みんな頑張っている。これが昔からの顔なじみばかりに囲まれていたら、やっぱり甘えてしまって、人も社会も成長しなくなってしまうのではないのでしょうか。

誰かが助けてくれると思うと、頑張らなくなってしまうのかも知れませんね。よく耳にする TPP (環太平洋パートナーシップ協定) を受け入れて、例えば自動車産業で稼ぐとか、農業が廃れるとかという単純な問題ではなくて、今は日本人の生き方そのものが問われる時代になっているんですね。皆が支え合うというのは素晴らしいことですが、それで凭れ合ってしまったら、地方のパワーというものは消滅してしまうんじゃないかしら。誰かに支えられなくても、一人の力で挑戦して、成功まで頑張るといふ強さが必要で、そのために努力とか、競争っていうことは、必要だと私は思っています。

どこに暮らそうとも、  
 大切なのは個々の意識

日本は先進国のうちで「若い人たちが自信を持ってない国」のひとつとされています。そうなった原因のひとつには大人が助け過ぎるということがあると思います。若い人たちとはよく一緒に仕事をし

ますけれども、何か行き詰まるとすぐに不貞腐れる、すぐ泣く。でも「不貞腐れたり、泣いたりする前にあなたはどんな努力をしましたか?」と聞きますと、「そんなに頑張りたくない。自分はそのなお金持ちにならなくてもいいし、出世しなくてもいい」という答えが返ってくる。そんなことでしか努力をする意味を測れないのは悲しいことです。

努力というのは、自分のなかに眠っている才能とか能力を开花させること。頑張るって、そういうことです。だから努力とか頑張りというのは大切なんです。そういう意味で田舎は、時々、優しすぎるなあ、のんびりすぎるなあ、と思うことがあります。例えば、以前うちのお風呂のボイラーが壊れたとき、東京であればその日のうちに見に来てくれるでしょうけど、地元では、頼んで2か月たっても何も音沙汰がありませんでした(笑)。2か月はいくらなんでもかかり過ぎでしょ(笑)。これは一つの例ですが、田舎は時々、のんびりすぎて、困ることもあります。それは地域にとっても損失になってしまうと思います。今みたいに世の中が激しく動いていく時代においては、自分たちの地域社会の立ち位置、つまり役割が、見えなくなってしまうから。国とか偉い先生とか、誰かのあとからついていくのではなく、一人ひとりの「時代を見る目」を今こそ養っていかなくてはね。

どんなにいい町長さんや市長さんがいらしても、都会からIターンして来る人がいても、その人たち任せに終わってはいけません。住民一人ひとりが地域のよさを発見して、「私はこうやりたいの」って役所にねじ込んで行く



くらいじゃないと(笑)。地方には日本の普遍性を守るという使命があるのですから。

### —— 「他人まかせ」になりがちな側面が、田舎にはあると?

ある時、私のところに地元のある団体の代表者が来て、「こうこうこういうわけで、われわれは困っている。ついてはテレビで取り上げるように言ってもらえないか」と。すぐに「それは私に頼むことじゃないでしょ。あなたたち自身がすることでしょう」と返しました。

### —— どんな反応でした? 「冷たいなあ」とか。

「冷たいなあ」とは言われませんでした。が、「そうですかー」と何か考える様子でトボトボ帰られました。ちょっとかわいそうな気もしましたが、そこはぐっとこらえました。

### —— 私も田舎へUターンした後、良い点ばかりを見ようとしてたんですが、ちょっと無理がありますね。

私もです。でも、それではバランスのある物の見方にはならない。すぐ足元にある欠点にも気づかないとダメ。そうじゃないと、外の人間に対して説得力がない。「自分たちはこういう点を改める。でもこういうことは頑張っているんですよ」という部分がなければ、地域の人や地域社会の主体性がなくなってしまいます。

### —— そういう意味では、東京と那須、ふたつの視点を持つというのはすごく大事ですね。それは都会と田舎の論争ということだけじゃなくて。

むしろ両方を生かすということ。実は、問題は両方に同じようにあると思いますから。

## 移住者も地元住民も、自分のスタイルを大切にすべき

地域との関わりについて言えば、都会に住もうと田舎に住もうと、仲良くできる人はできるし、できない人はできない。都会だからとか田舎だからとか、住む場所によって、その人の人間関係の上手・下手が変わるとは思いません。

住む人たちの気質という意味では、田舎の人はどちらかというのんびりしているし、都会はセカセカしている。どちらにも特徴があり、その種類が違うだけかなと(笑)。

### —— 田舎に来るとエネルギーを貰うとかよく言いますよね。

私が那須に拠点を移したのは、自然のある場所に住みたかったからです。都会には自然がないので田舎に住むしかなかった。自然に囲まれて育った人たちは、ものの考え方もおおらかだし、目先の利益にこだわらないという良さがあると思います。そういう田舎の人たちは好きだし、ずいぶん支えられています。

よく田舎は人間関係が密だから大変といわれますが、それは自分という個性を抑えてまで、地域に融け込もうとするからではないでしょうか。田舎でも綾部だったら綾部、那須だったら那須、いろんな場所がありますよね、数えきれないほど集落がありますから。その人に合う集落、合わない集落って絶対あるんですよ。

講演などでよく地方を回りますが、「絶対無理だわ」という場所はあります。「この考え方は合わないな。ここには住めないな」というところは誰にでもあると思うんです。

「地域に融け込む」ということを、移住した人が無理してすべきじゃないし、地元と

## Close-up

高木美保さんは、自然と共にある生活を求めて栃木県那須高原に移住され、農業に取り組むなど田舎暮らしを楽しみながら、芸能活動のみならず講演や執筆業など幅広い活動を展開されています。今回のインタビューは、第26回国民文化祭「京都2011」のイベントのひとつ、「シンポジウム「里山」」で基調講演の講師を務められた際、行いました。



平成23年11月6日、京都府綾部市にある京都府中丹文化会館で、「命を感じて暮らす里山文化」と題して講演される高木美保さん

しても、どうしても融け込ませなければならぬというものでもないと思います。

お互いの習慣や考え方を尊重し合い、お互いが「心地良く」過ごせればいいんですよ。もちろん、地域のマナーは大切です。例えばゴミの出し方とか冠婚葬祭とか、その地域独特な慣習もありますよね。でも、「この地域は昔からこうです。引っ越してきたんだから黙って従ってください」では、間違っていないんだけど、あそびがない。「なぜ、この人は、このことに戸惑っているんだろうか」と、新しく入ってきた人の立場で考えてあげることも必要ですね。

入った側も、「なるべくつきあいますが、おつきあいできないこともあります」と、なんとなく伝える技を身につけるといいんじゃないかなと。そうしているうちに、結局、いつのまにか、お互いの距離が縮まっていたというのが私の経験です。

### —— 那須の空気にはすっかり馴染まりましたよね。

那須だからって言うよりも、田舎で暮らすことがとても気に入っています。14年住んでみると、「もうちょっと山村らしいところに住んでみたいなあ」って気持ちが強くなってきました。観光地じゃないところで、ひなびた田舎の良さをもっと満喫したいなと(笑)。山の古民家を見つけて、あちこち自分で手を入れながら暮らしてみたいですね。

## インタビューを終えて

「言語明晰・意味明瞭」。次々に繰り出される実践田舎生活論に圧倒されました。女優、タレント、講演のスケジュールを縫って、那須での自然観察も。田舎生活のポイントを語っていただき、感銘を受けました。

うしぬし しろぐちはるゆき  
牛主 城口治享さんに聞く

# がらんこ勝負「闘牛」は熱い

愛媛県宇和島市

水源の里には、様々な文化や伝統行事が残されている。

このコーナーは、多くの先人たちによって継承されてきた匠の技を全国の皆さんに紹介。

今回は、愛媛県松野町で50年以上横綱級の闘牛を数多く育ててこられた城口治享さんを訪ね、その魅力をうかがった。



今年7月にチャンピオンとなった「城口号」と牛主の城口治享さん。相互の信頼は厚い



## 横綱牛を育て続けて50年

「闘牛」と聞けば勇猛、激突、歓声。そのような激しく賑やかなイメージが湧き上がる。1tを超える巨大な生き物を育て、ひとたび土俵に立てば、牛の戦意を引き出し、戦いを仕掛ける。当然、牛主は、太い腕、分厚い胸板、褐色に焼けた巨漢の人物……。勝手な印象をつくり上げ、その日を迎えた。今回取材するのは、牛主50年の大ベテラン。しかも、今年7月場所でチャンピオンとなった牛を育てた人だ。

小雨に濡れる午後。城口さんは、約束の時間に軽トラックの運転席で待っていてくれた。勝手な印象は、瞬時に霧消。今年76歳になるという城口さんは、想像していた巨漢ではなく、小柄でスリム。しかし、時折見せる眼光の鋭さは、まぎれもなく勝負師のそれだった。

早速、牛舎に案内していただいた。軒下にいすを2つ並べて取材が始まった。お話をうかがっている間も、奥の牛小屋からは「ゴツン、ゴツン」と硬いものを木材に打ち当てたときに発する不気味な音が聞こえてくる。「グオォ、ウギュー」と絞り出すような雄叫びに取材が途絶えることもしばしば。正直、腰が据わらない。

「こいつは大人しい性格じゃけん」と城口さんは、笑いながらサ

ラリと言う。これで大人しい性格なら猛々しい性格の牛はどんなだろう？ 想像すると背筋に冷たいものが流れる。

## 闘牛の世界にも変革の波

「昔、牛は家族の一員だった。寝食を共にし、子どもの頃から一緒に生きてきた」と闘牛に生涯を賭した経緯が紐解かれる。闘牛は宇和島市のほか、全国9つの地域に残っている。島根県隠岐の島町や鹿児島県徳之島町など有名だ。「農閑期に人々の娯楽として定着していた」と城口さんと言う。江戸時代の宇和島藩主、伊達家の古文書には、今から300年前に土俵を設けた本格的な闘牛が行われていた記述がある。

しかし、歴史ある宇和島の闘牛にも少しずつ変化の波が押し寄せている。「以前は、大半が隠岐の島から子牛を買い付けていたが、今では、生後1～2年の成牛を徳之島から買い付ける」と産地が九州地方中心となったのが第一の変化。産地が変わったことで牛の大型化が進んだ。横綱級でもせいぜい800kgだった

牛体は、現在1tを超えるまでになった。

第2の変化は、農作業の機械化が進み、牛は労働力として求められなくなった。つまり、闘牛に借り出す牛の数が絶対的に縮減した。

最後は、闘牛に対する人々の関心。娯楽の少ない時代には、集落あげて闘牛に興じた。男の子は、大きな牛を取り回す牛主の姿を英雄として見つめていた。「今では、闘牛に興味を持つ子どもは少ない」と嘆く。話をうかがっていて、大相撲がおかれている現状が重なった。力士の大型化、力士を志す若者の減少、そして大衆の興味低下。外から見る華々しさとは裏腹に、将来への不安を垣間見た。

## 人生いろいろ、牛もイロイロ

城口さんの口からいくつかの興味深い話が飛び出した。「牛は、2歳くらいで乳歯が生え揃い、4歳くらいで大人の歯に生え変わる。歯が生え変われば闘牛として、戦える年齢になったというサイン」。牛もホ乳類。人間と同じように歯が

宇和島市で定期的開催される闘牛大会。場内は熱気と歓声に包まれる



生え変わるんだ。

「闘牛はオス。肉用牛になるオス牛は、肉質をあげるために去勢される。闘牛になる牛は、去勢されることはないが、闘牛の使命を終えたら肉用牛として5万円程度で売られていく」オスはいつの世も悲しい生き物だな。

闘牛とて性格は様々だ。「戦いで傷つく。体の傷が癒えても以後、相手と戦うことを諦めてしまう牛もいる。一方で、傷つけば傷つくほど闘志が増し、最終的に横綱に上り詰めた牛もいる」。人間世界にもよくある話だ。人生が一筋縄でないように牛もイロイロ。城口さんは、多くの牛とのやり取りで、牛を育て、同時に牛にも育てられ今があるのではないかと……。『阿吽の呼吸』そんな言葉が脳裏に浮かぶ。

### 命がけの格闘技

「突きの破壊力と攻撃力を高めるため、子牛の時から角を縛り眉間に寄せる」と城口さんが説明するように宇和島の闘牛は、勝利するために様々な工夫や準備をするのが特徴だ。試合の10日ほど前から食事の量を通常の3分の1に減らし、マムシを粉末にしたものを酒で溶き与えることで、猛々しい牛の野生を呼び起こさせる。また、体力づくりを目的に毎日2kmの散歩を欠かさない……など、怠

りなく勝利への準備をして大舞台を踏むのである。

「昔、牛に捲かれて背骨を骨折。半年間、病床に臥せったこともある。それでも、闘牛をやめようと思ったことはない」と城口さん。宇和島の闘牛がショー的なものとは一線を画す、命がけの格闘技であることの証だ。

### 守りたい300年の歴史

闘牛を取り巻く環境は、ずいぶん様変わりをしている。農閑期のささやかな楽しみから宇和島に観光客を誘導するツールに。農作業用から闘牛のための牛づくりに。集落あげての支援から個人の趣味的な取り組みに……などがその内容である。「このままでは、廃れてしまう」と城口さんは警鐘を鳴らす。買い付けには高い牛で一頭100万円が必要。さらに年間50万円の育成費も。一方、報奨金は、横綱級で1試合に10万円程度。経済的に考えれば、成り立つものではない。

現在、牛主は約50人いるが、そのほとんどが高齢者。最大の課題は、後継者と資金不足だ。学校の授業で子どもたちに闘牛の歴史や魅力を教えるとか、闘牛を

観る機会を作るなど、ソフト的な取り組みが急務。加えて、牛主が将来も牛を飼い続けることのできる経済的な支援も検討されるべきでは？と感じる。

言い古された言葉だが「物事は一度やめてしまうと、再度始める時は、2倍の労力を要する」というのがある。宇和島闘牛は、人々の生活の中にどっしりと根を張り300年もの長きに亘って、愛され続けてきた。「ワシは牛も、闘牛も好きやけん」。その城口さんの言葉に報いる時こそが今ではないか。

(取材・文：永井晃)

### 編集後記

毎回、水源の里を訪ねて集落で頑張る人々や伝統行事、優れた文化などを紹介させていただいている。その都度感じることもある。日本は今、空前の円高に晒されている。またTPP（環太平洋パートナーシップ協定）について、様々な議論があり、長年わが国を守ってきた貿易や農業の枠組みが転換されようとする重要な局面を迎えている。それでも、この日本という国を支えてきたのは、農村だなあと改めて思う。農業に従事する人を「百姓」というが、「百姓」は百の仕事をこなせる知識と業を持つ人の敬称なのだ。

10月23日父が他界。90年の人生に幕を閉じた。彼も尊敬できる百姓だった。厳しい優しさを身につけた人でした。あなたの子どもの生まれて感謝しています。ありがとう。

### 宇和島牛鬼

宇和島市は、平成17年8月に宇和島市と周辺の3町が合併。市域面積469km<sup>2</sup>、人口8万5千人の都市となった。市域には5つの有人島と多数の無人島が含まれている。産業はミカンを中心とする果樹栽培やハマチ、タイ、真珠の養殖など、農林水産業が盛ん。名物にはじゃこ天、鯛めし、牛鬼まつり、闘牛などがある。市内の商店街を歩くと一風変わったお面を度々目にする。「これは何ですか？」と尋ねると「牛鬼」と答えが帰ってくる。牛鬼とは、一説には豊臣秀吉が加藤清正に朝鮮出兵を命じ、晋州城を攻めたとき、敵の矢や石から身を守るために考案した亀甲車が起源とされている。亀甲車は、板で箱の形を作り、表面を牛革で覆い、先頭に牛の首首を掲げ、中に兵士が入って戦った人力戦車のようなもの。宇和島市では毎年7月に「牛鬼まつり」が盛大に開催され、牛鬼が市内を練り歩く。牛鬼の面は、厄除けとして、玄関などにも飾られる。



毎年7月に開催される「うわじま牛鬼まつり」。牛鬼は長い首、尻尾の剣が特徴。悪霊を払うと言われている

### 宇和島城

伊予宇和島藩は、伊達政宗の長男秀宗が初代藩主として入部。伊達家は、伊予宇和島10万石を明治維新まで統治した。「宇和島城」は築城の名人、藤堂高虎の創建。日本屈指のリアス式海岸の利点を最大限に活かし、その最深部に築城。特徴は、五角形平面の縄張りにある。城は本来四角形に縄張りされるが、それをあえて五角形とすることで、敵に錯覚を与えると同時に、攻撃の際の出撃口を確保。2代宗利が三重三層の総塗籠式に再建し現在に至る。御殿建築の意匠が随所に見られる格式の高い名城である。



宇和島城は、均整のとれた美しい姿から「鶴島城」とも呼ばれています。国の重要文化財の天守は宇和島のシンボル

## Photo Story



築城の名人、藤堂高虎が自然の要塞と称した宇和島湾から豊後水道を望む

### 鯛めし

本当にうまいものには虚飾がない。宇和島名物「鯛めし」もまさに素材が勝負のごまかしのきかない一品だ。もともと、この地方に土着する伊予水軍が考案したと伝えられている。火が使えない船上で、酒盛り後の締めめに食べたのが起源という。新鮮な鯛を三枚におろし、刺身よりも薄く切り分ける。醤油、みりん、だし汁で調味したタレに漬け込み、生卵、ゴマ、ねぎなどを混ぜ、だし汁ごと温かいご飯にかけて食べる。豪快で単純な海鮮料理だが、新鮮な鯛のコリコリとした食感と卵かけご飯の柔らかさが口に広がる。そのアンバランスが病み付きになる。

お値段も、お吸い物と漬物がセットで800円からと、リーズナブル。宇和島を訪れたら一度は食したい。



伊予水軍が残した食文化が「鯛めし」。新鮮な鯛を焼き立てご飯にのせていただく

## 第3回 全国水源の里フォトコンテスト

「水源の里」の四季折々の表情や営まれている生活・文化など、日本の原風景を写真に収めていただく「フォトコンテスト」。第3回を迎えた今年は、431点の応募がありました。

厳正な審査の結果、グランプリ、総務大臣・農林水産大臣・国土交通大臣など各賞を決定。10月26日に大分県佐伯市で開催した第5回全国水源の里シンポジウムで表彰を行いました。

審査員 審査委員長 いのうえたかお 井上隆雄 特別審査員 たぬまたけよし 田沼武能、いのうえはくどう 井上博道（敬称略）

### グランプリ 『古代織の美』 北海道清里町 本橋 正康さん(北海道帯広市在住)



#### 受賞コメント

——本橋 正康さん

清里町の「男鹿の滝」で撮影しました。斜里岳の中腹から湧出する銀嶺水は一日3万トンと言われ、まさに水源です。滝正面には瀑布があり、側面は、繊細、優雅な表情を見せています。いつまでも自然のままであって欲しいと思います。



講評 これぞ水源の里という印象が強く感じられます。じわじわと水が染み出し、大地の滋養を引き出して流れていく様子が良く表現されています。決して派手ではないが、これが本当の「水源の里」。説得力のある作品です。

#### 総評 | 水源の里を理解することが作品の質向上に

水源の里フォトコンテストには、第1回から参画させていただいてきました。3回目を迎えた今年は、応募点数も400作品を超え、水源の里の様々な表情を収めていただけるようになってきました。水源の里を理解し、そこに住む人々との交流が写真に活かされています。今後も素晴らしい作品が増えることに期待しています。

田沼武能特別審査員

#### 水源の里から 東日本大震災を支援

今回のフォトコンテストの応募料43万1千円は、東日本大震災の復興支援のため、全額を日本赤十字社に寄付しました。



優秀賞・総務大臣賞  
『盆送り・施餓鬼』  
高知県大豊町  
田村 啓さん  
(高知県高知市在住)

講評 川辺で先祖に感謝する法要が行われています。作品から伝統と文化がひしひしと感じられ、自然との共生、水源の里の営みが良く表現されています。



優秀賞・農林水産大臣賞  
『飯豊の里』  
山形県小国町  
丹治 美知夫さん  
(福島県福島市在住)

講評 田植えが終わった後の水面に映る山の姿。水源となる山なみと田んぼの関係が表現されています。表現の方法が良く、お米が穫れる原点が水であることが感じられます。



優秀賞・国土交通大臣賞  
『田んぼに遊ぶ』  
和歌山県田辺市  
平山 弘さん  
(和歌山県田辺市在住)

講評 虫捕りをしている子どものそばに猫がいる構図が、いかにも山村での暮らしが写し出されています。演出ではなく、子どもと子猫の関係が自然体で写されており感動しました。

特選20作品は、15号と16号の裏表紙で紹介します。

水源の里  
発

おすすめ  
ぶ当地  
グルメ



## ZENZAI ロール 1,000円 (土日限定)

### 島根県出雲市

島根県出雲市には出雲大社や日御碕灯台といった名所があり、全国から多くの観光客が訪れています。しかし、昭和40年代後半は年間300万人あった観光客も、近年は220万人程度となり、以前ほどの賑わいが失われつつあります。そこで、「縁結びの町」をキーワードに出雲から全国にアピールする方法はないものか、と平成20年度から調査研究を始めたのが出雲商業高等学校経済調査部でした。

着目したのは出雲発祥の「ぜんざい」。ローマ字表記で「ZENZAI」となる文字の中に、「EN（縁）」と「AI（愛）」があることになぞらえ、「縁と愛」を出雲から」というテーマのもと、オリジナルぜんざいの開発に取り組みました。高校生の斬新なアイデアと、それを裏付ける緻密な市場調査を重ね、「縁結びぜんざい」のほか、コンビニ大手のファミリーマートと共同開発した「ぜんざい風ミルクプリン」「ぜんざい風シュークリーム」などを製作・販売。マスコミにも広く取り上げられ、出雲市のPRに大きな成果をあげています。

そんな出雲商業高校生と市内のクレール洋菓子店が共同開発して、今話題の商品が「ZENZAI ロール」。出雲産の米粉を使ったスポンジの中に、小豆入りの生クリームとお餅の一種の求肥シートを巻いてぜんざいらしさを表現しています。

ずっしりとしたボリュームに反して、まるでメレンゲのような柔らかさのロールケーキを、つぶさないように注意しながら優しくカットして一口。おおっ、スポンジがふわっふわできめ細かい！ 口溶けのよいクリームは、小豆の自然な甘味が生き、モチリした求肥が独特な食感のアクセントとともに、クリームにトロミのようなまったりとしたコクを与えています。甘すぎないので見た目よりあっさりとしただけ、緑茶にもコーヒーにも合う和と洋が絶妙にマッチした「縁結びスイーツ」です。

【取材・文】白波瀬聡美



商品開発はすべて高校生達のアイデアによるもの。女子高生らしいパッケージやケーキ表面のハートマークのデザインも、キュートに縁結びを演出しています。

#### 【お問い合わせ】

**クレール  
洋菓子店**  
〒693-0011  
島根県出雲市大津町3906-1  
TEL/FAX  
0853-23-8191  
営業時間/10:00～19:30（不定休）  
<http://clairizumo.web.fc2.com>

【出雲商業高等学校経済調査部ブログ】  
<http://izusyokei.exblog.jp/>  
生徒の活動の様子を日々更新中！  
ぜひご覧ください。



ZENZAI ロールの生産は土日限定で、平日欲しい場合は2日前までに予約が必要です。



## かきませ (1パック)298円～

### なか 徳島県那賀町

四国第2の標高を誇る霊峰 剣山を望み、那賀川の清流をたたえる山あいの町、徳島県那賀町。県の6分の1に及ぶ広大な面積を有するこの町は、日本有数の豪雨地帯で、豊富な水が多くの特産品を育んできました。中でも木頭地区（旧木頭村）発祥の「木頭ゆず」は全国ブランドの名品。石灰質の土壌と夏に冷涼で多雨、寒暖の差が大きい気候が、甘味のある香り豊かな美しいゆずを育てます。

名産のゆずを使った那賀町自慢の郷土料理が「かきませ」。かきませとは、お酢の代わりにゆず果汁（ゆず酢）を使って作る「ちらし寿司」のこと。この地域では、稲刈りやゆず取りの合間に田んぼの畦や畑で食べる軽食、また地元のお祭りや寄り合いの際に作るパーティ食として、昔から親しまれてきました。

「なんにもないけん、かきませでもつくろうか」という感じで、各家庭のレシピで作られるかきませですが、その大まかな定義は「ゆず酢を使っている」「旬の山菜、野菜を入れる」「豆や芋を入れる」「具が多い」「気軽に作って愛情を込める」の5つ。ゆず酢は、特製のゆず搾り器を使って手しぼり。こうすると皮の苦味が出ず、良質なゆず果汁をしぼることができるそう。爽やかなゆず酢の味わいが全国で評判になっているB級グルメです。

油揚げ、こんにゃく、しいたけ、にんじんといった定番具材に、甘煮の金時豆やソコマメ（落花生）、じゃがいも、さといもなど、とにかく家にある旬の食材がどっさり入ったかきませは、見るからに家庭の温かみが溢れます。色とりどりのご飯を口に運ぶと、柑橘系のフルーティな香りがふんわり。わあ～いい香り！ 酸味はやや強いですが、ほの甘い煮豆などの具材と合わさるとちょうどいいバランスに。一般的な醸造酢の鼻にツンとくる感じが苦手な人にも食べやすい、ほっこり優しい美味しさです。

【取材・文】白波瀬聡美



米酢のかわりにゆず酢を使うのが「かきませ」最大の特徴。手しぼりのゆず酢だと、味も香りもさらにアップ。

#### 【お問い合わせ】

**徳島県那賀町役場  
企画情報課**  
〒771-5295  
徳島県那賀郡那賀町和食郷字南川104-1  
TEL 0884-62-1184  
FAX 0884-62-1177  
[kikaku@town.tokushima-naka.lg.jp](mailto:kikaku@town.tokushima-naka.lg.jp)

## 第5回全国水源の里シンポジウムを開催

「水源林の保全～森林の相続と売買～」をテーマに

10月26・27の両日、大分県佐伯市で第5回全国水源の里シンポジウム（主催・同実行委員会、実行委員長・西嶋泰義佐伯市長）を開催しました。自治体関係者や地域住民ら約350人が参加。水源の里の課題である水源林の保全をテーマに、熱心な議論や意見が交わされました。基調講演やパネルディスカッションの様態を報告します。

### 26日 1日目 ●基調講演●

「日本の水源林の危機」と題して吉原祥子さん（東京財団 研究員兼政策プロデューサー）が基調講演を行いました。

経済のグローバル化により「土・水・緑」などが外国資本の投資の対象となるとともに、過疎地では、土地への「無関心」、売却意欲の高まりなどから、山林の取引面積が、過去10年間で倍増している実態を報告しました。さらに現在の地籍調査の進捗状況や法に基づく売買届出、不動産登記制度などでは、土地の所有、売買実態を正確に把握することが困難であること。土地所有権が強く、土地の公共性を担保するルールも不備であること。などの課題を指摘しました。

その上で、国レベルでの土地の売買や利用に係る制度整備を図るとともに、自治体において地域の特性に応じたルール整備を進めることの必要性を述べました。

### ●パネルディスカッション●

基調講演を受けて「水源林を守る」と題して遠藤日雄さん（鹿児島大学農学部教授）のコーディネートにより、吉原祥子さんを交えパネルディスカッションを行いました。

森林所有者の不明や不在、相続の問題、あるいは「不透明な森林売買がなぜ起きたのか」「この事態に歯止めをかけるために何が必要なのか」などパネリストのみなさんから意見が出され、水源林を豊かにするため、国、自治体、住民など、各々が解決に向けた役割を担うことの大切さを訴えました。

#### 戸高壽生さん（佐伯広域森林組合代表理事組合長）

佐伯市では、炭焼きや原木づくりが盛んであった。その後、森林組合の主導で、スギなどの植林も実施した。しかし今では、林業をあきらめた所有者が多く、今後の林業をどのように守っていくかが重要。10年先には消えてなくなる中山間地域があることを視野に入れながら、行政と連携して林業振興を進めていくことが重要である。

#### 後藤國利さん（百年の森健全育成実践クラブ代表）

林業白書によるとスギの50年生では、1ヘクタール当たり248万円のコストが必要となる。これに対し、取引材価は1ヘクタール当たり90万円程度。これが林業の現状である。水源や森林の保全が危惧される中、自治体は林業の将来について、主体的な意志をもって取り組むことが重要となる。

#### 足立紀彦さん（大分県農林水産部審議監）

林業は材価が安く、経営者が意欲を失っていることに衰退の原因がある。この状況が長く続けば人工林は、健全管理ができなくなる。低コストで森林を管理しようとするれば、林地の集約が必須条件だが、森林境界の不明が課題となる。今後、人工林の伐採などについて、国内法で規制していくことが必要だ。

#### 長瀬一己さん（北川漁業協同組合代表理事組合長〈宮崎県〉）

宮崎県はスギの素材生産量が17年間日本一。北川では、伐期となった30年～50年生の造木を残した。北川は70パーセントが人工林。保育や管理のために林道や作業道が整備されているが、これが原因で山が壊れている。水源や流域に雑木林を残すことこそが、流域に住んでいる人々の努めである。

### 27日 2日目 ●まちづくりのヒントを視察

山辺コースと海辺コースの2コースに分かれて佐伯市内を視察。山コースでは、ジビエ料理（狩りで捕獲して食用にする野生動物の料理）の商品開発、スギ材の製材工場、里の駅「大水車の郷」を、海コースでは、水産物加工施設、豊後水道が一望できる「空の地蔵尊」、地域の集いの場「さいき茶の間、青山ピンコロ軒」を視察しました。



## インフォメーション

### 全国水源の里連絡協議会 第5期総会を開催

平成23年10月26日（水）、大分県佐伯市で第5期総会を開催しました。役員を選出、第4期の報告と決算見込み、第5期事業計画と予算を決定しました。

#### 役員選出

<b>会 長</b>	大分県佐伯市	西嶋泰義
<b>副会長</b>	福島県喜多方市	山口信也
	山梨県道志村	大田昌博
	岐阜県白川町	今井良博
	京都府綾部市	山崎善也
	島根県邑南町	石橋良治
	高知県大豊町	岩崎憲郎
<b>監 事</b>	北海道中川町	川口精雄
	和歌山県田辺市	真砂充敏
<b>顧 問</b>	前会長	四方八洲男

（敬称略）

### 第5期事業計画

第5期の協議会活動は、①250市町村の参画を目標とし、組織の拡大を図る。②第6回全国水源の里シンポジウムに協賛する。③情報誌『水の源』を発行する。誌面の充実を図るとともに、購読者の拡大に努める。④第4回全国水源の里フォトコンテストを実施する。⑤協賛・募金活動を実施する。⑥国に対して、水源の里の理念の普及と集落再生に向けた施策の展開を要望する。⑦水源地域の森林の保全育成を目指し、森林環境税及び水源税の推進に努め、関係団体との連携を深める。以上の7項目が議決されました。

**第6回全国水源の里  
シンポジウムは、  
岐阜県白川町で開催されます。**

#### ▲全国水源の里連絡協議会 事務局

佐伯市役所 企画商工観光部 企画課総合政策係  
住所：〒876-8585 大分県佐伯市中村南町1番1号  
TEL：0972-22-3486（直通） FAX：0972-22-3124  
E-mail：s-suigen@city.saiki.lg.jp  
<http://www.suigennosato.com/index.htm>

## 編集部より

### 全国水源の里基金の募金にご協力を

全国水源の里連絡協議会では、「上流は下流を思い、下流は上流に感謝する」の理念のもと、全国に連帯の輪を広げ、水源の里の振興を図るため、全国の会員市町村に募金箱を設置し募金活動を実施しています。水源の里を守り、豊かな環境を次の世代に引き継いでいくために、ぜひ募金にご協力ください。

### 編集部より 読者アンケート&プレゼント

『水の源』では、今後の誌面づくり充実のため、読者アンケートを実施します。ぜひ、皆様のご意見をお聞かせください。

アンケートにお答えいただいた皆様の中から、おすすめご当地グルメのコーナーで紹介しました「ZENZAIロール」か「ゆず酢」を各3名様にプレゼントします（賞品の指定はできません）。



①『水の源』の誌面で面白かった記事、②今後取り上げてほしい内容、③水源の里への思いなど、あなたのご意見を官製はがきに記載し、住所、氏名、電話番号、年齢、職業、性別を明記の上、下記宛先までご応募ください。※当選者の発表は賞品の発送をもってかえさせていただきます。※ご応募いただいた皆様の個人情報は、賞品発送以外の目的では使用いたしません。

**応募先：**下記連絡先、『水の源』読者アンケート係まで

**締 切：**平成24年1月20日（金）消印有効

### 『水の源』定期購読者募集

本誌を定期購読していただける方を募集しています。  
年間購読料：1,000円（年4回発行）  
お申し込み：下記連絡先、『水の源』定期購読係まで

### お問い合わせ、ご連絡先は

〒623-1122 京都府綾部市八津谷町上荒木5番地  
（上林いきいきセンター）  
綾部市水源の里・地域振興課  
TEL 0773-54-0095 FAX 0773-54-0096  
E-mail：suigen@city.ayabe.lg.jp



# 第3回 全国水源の里フォトコンテスト特選作品



『惜しむ秋』北塩原村  
丸山 淑恵さん (長野県佐久市)



『神秘の湖畔』王滝村  
森脇 章さん (奈良県大淀町)



『秋冷の朝』南丹市  
榑 隆雄さん (愛知県春日井市)



『農夫』大豊町  
寺田 裕彦さん  
(滋賀県草津市)



『日本海に注ぐ千年水』  
香美町  
長 昌男さん (兵庫県香美町)



『神秘の湖面に映える』  
王滝村  
深井 行雄さん  
(長野県上田市)



『滝まつり』海陽町  
田中 安雄さん  
(岡山県赤磐市)



『初雪』小国町  
齋藤 徹さん (山形県飯豊町)



『天狗様が通る』飯能市  
池田 紘治さん (埼玉県入間市)



『山かいの田植』白川町  
渡邊 恒雄さん (岐阜県白川町)

## 水の源 第15号

企画・発行：▲全国水源の里連絡協議会

発行日：平成23年11月

編集：「水の源」編集委員会

私たちは  
水源の里を  
応援します!!

全国環境整備事業協同組合連合会・会長	玉川福和
全国農業協同組合連合会・代表理事理事長	成清一臣
全国森林組合連合会・代表理事会長	林 正博
電気事業連合会・会長	八木 誠
独立行政法人 水資源機構・理事長	甲村謙友
社団法人全国浄化槽団体連合会・会長	上山健治郎
社団法人全国清涼飲料工業会・会長	前田 仁
社団法人大分県薬剤師会・会長	安東哲也

(敬称略)